

ラウンドテーブル

2009年11月21日・23日 埼玉県立近代美術館 講堂
 第1部(21日) オリエンテーション・活動報告 / 交流懇親会
 第2部(23日) 分科会・全体会

趣旨

〈ラウンドテーブル〉は、アーティストやそのグループ、コーディネーター、支援者、NPO団体の方々が集まり、アートの自由な感性を大切に人々のネットワークづくりを目指して開催されました。埼玉県内には「アートの力」を活用した活動を行う、数多くの意欲的な取り組みが見られます。〈ラウンドテーブル〉は、こうした活動が当面する問題を共有してお互いに学び合い、コラボレーションの輪を広げるとともに、社会的な発信力を高め、これからの持続的な芸術文化活動の環境づくりのための意見を交換する場を作ることを目的として行われました。

第1部報告

初日の第1部では、川越で「まち歩きプログラム」やさまざまなアートの企画展を中心に活動している《アルテクルブ》、宮代町で地元の竹を使ったユニークな野外アート展示を毎年開催している《竹のアート実行委員会》、川口で障害者

の創作活動支援を通して社会参加をサポートするさまざまな活動を行っている《川口太陽の家・工房集》、「埼玉美術の祭典」から30年以上の歴史を持ち実力作家の集う現代美術展として定評ある《CAF.N》、「まちを美術館に」をキーワードに越谷市で地域の人々とのコミュニケーションから生まれた作品を商店街に展示するなどユニークな活動を展開している《まちアートプロジェクト》、浦和のまちを知り「住み心地」のよいまちづくりをめざして地域文化創造も視野に入れたさまざまな活動を行っている《うらわ建築塾》、毎月の「建築相談室」で市民から無料相談を受けるとともに「ヒアシンスハウス」の運営支援を行っている《JIA埼玉(日本建築家協会関東甲信越支部埼玉地域会)》、さらに《KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)》、《キラミン・ラボ舎》、《ヒアシンスハウスの会》、《NPO法人元荒川をきれいにする会》を加えて、計11団体から活動報告を行っていただきました。

広い視野からアートを捉えて、地域で具体的な展開を試みる各グループの多彩な活動やユニークなアプローチは、それぞれに新鮮で多くの



示唆に富むものでした。その後の交流会も含めて、さまざまなアート活動に携わる方々が出会い、お互いが直面する課題の一端にふれる貴重な機会になりました。

(中村誠 / 埼玉県立近代美術館・SMF事務局)

第2部報告

11月21日の「開会式・オリエンテーション・各グループ活動報告」を受けて、23日の「分科会・全体会」では、『Aアートは地域に何ができるか』、『Bアートのつなぐ力』、『Cミュージアムというプラットフォーム』という3つテーマに沿って参加者全員で大きなひとつの輪を作り、話し合っていました。

『Aアートは地域に何ができるか』では、参加者の方々の活動の背景をふまえながら、場所・地域と向き合うことの意味をめぐり意見交換がなされました。アーティストや建築家などがアートを通して地域に関わることへの意義や特性、地域性をふまえることによる活動の面白さ、問題点などを共有していきました。

『Bアートのつなぐ力』では、日常の社会や生活にアートが関わりをもつことで、さまざまな人や団体、場がつながる事例を報告し合い、その上で『A』の話をふまえながら、参加者の視点で「アートのつなぐ力とは何か、何をつないでいくべきか」をひもといていきました。議論の中では、アートが自然やその場にあるものとつながり、その結果として人と人をつなぎ、大きな流れになることなどについて活発な意見が出されました。

『Cミュージアムというプラットフォーム』では、はじめに近年、美術館に期待されている動きのひとつには、より機動的で柔軟な地域のプラットフォーム(基地)としての可能性があるということが取り上げられました。その背景をふまえて参加者各自に、美術館に対するイメージとともに、今後、美術館にはどのようなことが必要になってくるのかについて発言してもらい、「人々が集い、参加し、交流するための基地」としての美術館の可能性について意見を出し合いました。

この〈ラウンドテーブル〉をきっかけに、多くの方々の出会いの場が生まれたと思います。結論を出すことのできない大きなテーマでの話し合い

でしたが、この集まりを出発点として、ゆるやかに参加者どうしがつながり、さらにこの輪を広げつつ、それぞれの活動を展開していく必要があることを話し合うことができました。そして、このつながりを継続し、より確かな基盤づくりのために、SMFの活動で出会った方々が集う「縁側」のようなものとして、月に一度「SMFアート楽座」を開催することとなりました。また参加者の方々が主体的に研究会や交流会を企画し、またイベントの開催を行い、SMFの「アートバンク」への情報登録をして、つながり続けていくことを確認し合いました。これからのSMFの活動にご注目ください。

(鈴木真里子 / SMF協力委員)

回顧:〈ラウンドテーブル〉に集まって

〈ラウンドテーブル〉では事前に、40あまりの団体や個人の方々へ参加の呼びかけを行いました。埼玉県には、どうしても東京へ向かう沿線ごとに諸活動が分断されてしまう傾向がありますが、それぞれのエリアから最終的には団体・個人合わせて60人ほどの、さまざまな分野の表現者たちが



参集しました。自由討論というかたちで意見交換をしてみて、それぞれの問題意識にはさまざまな彩りがあると感じました。深く生きようという思いから発生してくるアート、それはどこへ向かうのか、誰と響きあうのか。議論を超え、表現の現場で刺激しあうことの必要性など……。また、当日の飛び入り参加の方が思ったよりも多く、率直なご意見が聞かれて興味深いものがありました。総じて、街のなかでニュートラルな「プラットフォーム」として「ひらかれた美術館」が機能している一面を見る思いがしました。

アートの核のまわりに、星雲のようにまとわりついている、さまざまな人の営みや地域の文化。また、それを振り払ってしまいたいという欲求。それらを皆、埼玉という空間の中で攪拌してみる、それも道を拓いていくことにつながるのではないのでしょうか。

(青山恭之 / SMF運営委員)

